■随想

奇跡の授業・授業の奇跡

冨永明夫（高2回）

何を書いたものか、と考えあぐねていたところへ、わが《中47回／高2回在京同期会》が刊行準備中の『校舎が軍需工場になった　回顧文集』についての中間報告が届いた。この文集はだいぶ以前から、かなりの人数を動員して推し進めてきたプロジェクトで、うまくまとまれば刮目すべき成果になると期待しているのだが、今回はその報告に触発されて心に蘇ったことなどを書き綴ってみようと思う。

「校舎が軍需工場になる」という事態は、その場に立ち会った者でないと、中々思い及ばぬようなディテールを多々含んでいる。それは各教室の隔壁が取り払われ、黒板も教壇も消え、机と椅子が運び出され、代りに六台か八台かの万力を備え付けた、分厚い木製の作業台が運ばれてくる、ということである。また、雨天体操場や柔道場・剣道場の床にコンクリートが打たれ、旋盤・フライス盤を始めとする重厚な工作機械が据えつけられる、ということでもあった。そして窓にも廊下にも、要するにガラス窓のあるところには、すべて分厚い遮光カーテンが取り付けられ、灯火を遮った。講堂は食堂と変じ、そこで我々は毎日、判で押したような献立――豆粕入りの飯に塩蔵鱈子のボイル――を黙々と食った。

私は「第一仕上」という部署に配属されたのだが、仕上工には手先の器用な者を選ぶべきであったろうに、「仕上」に回されたのは、旋盤工としての適性検査に合格しなかった者（つまり、旋盤の刃物台へバイトの代りに毛筆を取り付け、墨汁を浸したその筆先で紙上に菱形を描き出すテストで、ハンドル操作をうまくこなせなかった者）だったのである。

ズブの素人の生徒たちは要するに見習工であり、その十数名を束ねるかたちで一人の熟練工が配置され、新米

●とみなが・あきお
昭和7年東京生まれ。同19～24年飯中へ疎開転入。東京大学大学院（仏文）修了。同大学教養学部等で仏語・仏文学を講じた。スタンダール『赤と黒』などの訳書、『スタンダード仏和辞典』（共著）。東京大学名誉教授。

の「指導」にあたるという方式だった。が、そもそも技倆というものを全く持たず、技倆によって何を為し得るのかを見透すことすらできない生徒たちにとって、工員たちの高度の技倆は何の参考にもならなかった。工員たちだって、おそらく絶望していたことだろう。痩せても枯れても「九七式転輪」という名のジャイロコンパスは、精密機械のはしくれだったのだから。

選択性の週一回の特別授業

豊川海軍工廠・飯田分廠の見習工だったあの数ヵ月の間、我々は、何に使うのかも判らない無数の細々とした部品を、何とか設計図に沿って作り上げようと努力を重ねていたが、その大部分は要するにオシャカ（出来損ない）にほかならず、おそらく技術将校たちも、そんなことぐらいは疾うに見抜いていたはずなのである。

そうした全く展望を欠いた作業の連続は、しかし三交代制・24時間勤務というシステムによって支えられていた。たぶん、数の乏しい工作機械をフル操業させるための工夫だったろうが、例の海軍伝統のスローガン「月月火水木金金」に基づく不毛な精神主義の現われだったかも知れない。

すなわち、全在校生は三つの班に分けられ、たとえば第一週はA班が「一直」、B班が「二直」、C班が「三直」。第二週はB班が「一直」、C班が「二直」、A班が「三直」。第三週はC班が「一直」、A班が「二直」、B班が「三直」。そして四週目には元に戻る、といった式のローテーションが組まれたように思う。こうした窮屈な時間のやりくりの間隙を縫って実現したのが、選択制による週一回の特別授業だった。県立飯田中学校は教育機関たることを放棄しなかったのである。先生方の熱意なくしては、おそらく実現不可能な企てだったろう。

たしか一直の済んだあと、あるいは二直に先立つ時間帯に設けられたその授業は、当時としては異例の二コマ続きのものだった。科目として何があったのか、残念ながら確たる記憶がない。数学、物理（当時の公的科目名は「物象」だった）、国語・漢文等はもちろんあったろうが、英語は果してどうだったろうか（ぜひ書き添えておきたいが、東京の中学でも飯田でも、「敵性語」として英語を軽んずるという風は全く見かけなかった）。ともかく週に一遍しかない授業であり、しかも選択できるのは一科目だけである。何にしようか、と思い悩むのは当然だった。迷ったあげく私が選択したのは、北原明治（オンマ）先生の「東洋史」だった。

歴史に格別の興味があったわけではない。まして得意

科目というわけでもない。それどころか、東京の中学では一年一学期の中間試験に「東洋史」で「五等」という評価を得たくらいなのだ（その学校では成績は10点刻みの六等級で表わされ、五等は50点台を、六等は落第点を意味した。しかも試験のあとの授業で、担当教師は「……タカハシ三等、トクマス二等、トミナガ五等……」などと全員の成績を朗々と読み上げるのだった）。

北原先生に特に惹かれたというわけでもない。一年生の二学期から「疎開生」として飯田中学に編入されており、先生の授業も受けていたはずだが、特に感銘はなかった。というか、あらゆる科目、あらゆる授業に対して、ニル・アドミラリ（無感動）を決めこみ、それがいっぱし恰好のいいことだぐらいに思っていたフシがある。それにしても、わざわざ「東洋史」を選択したのは、やはり「五等」のトラウマを引きずっていたのだろうか？

北原先生は元来生徒のウケを狙うような先生ではない。およそサービス精神に欠けた、無愛想な先生だった。あの、ほとんど威圧的ともいえる大柄な体躯の割には、意外なほどの小声でボソボソと陰気に講述なさる――それが一年次に聴講したときの印象だった。だから、教室に出たときも特段の期待はなかった。ところが、授業が始まってみると、自分がそれまで全く経験したことのない空間に身を置いていることに気がついた。生徒の数はそう多くなかったように思うが、何しろ自らの選択によりその教室に馳せ参じた者の集まりだから、ふだんの教室とはまるで雰囲気が違う。先生もまた、期するところがおありだったのだろう。ボソボソ声は相変らずだが、口調や顔の表情に一種の熱気がこもっているように受けとれた。

残念ながら、その教室でいかなる内容の知識を授けられたのか、あるいは先生の歴史観とか教育理念とかいったものに触れることがあったのかどうか――いくら記憶を辿ってみても今は全くおぼろである。にも拘わらず、ここではっきり断言できるのは、まるで吸い込まれるように、私が熱心に講義に聴き入ったということだ。「授業」というものを、あれほど「面白い」と思ったことは後にも先にもない。

たしかに、旱天の慈雨にも喩うべき事情が介在したことは疑いない。中学二年生といえども、知的な飢えを感ずることはあったのである。週に三十コマあるいはそれ以上もあったころ、授業の大半は退屈なものだった。ところが週二コマだけになってみると、それは俄かに尊いもの、有難いものに変容するのだった。

それにしても、この特別授業がどれだけ持続的に行われたのか、記憶が定かでない。が、仮にそれがかなり短命なものに終ったとしても、あの授業が私に与えたイン

パクトの大きさに変りはない。

「教わる」ことの有難味

ずいぶん後年のことになるが、大先輩にあたる某先生の最終講義に、同年輩の同僚と一緒に参列したことがある。昔の教え子たちの顔が並ぶ教室で、先生は少々テレながら、しかし篤実な声調を終始崩さず、淡々と講義を進められた。資料として、演題に関連するテクストのプリントが配られ、噛んで含めるような訳述が行われ、諸家の論評についての解説に続いて先生御自身の個人的感想などもつけ加えられ、次第に結論的な部分に至る、といった経過だったと思う。最後に、思い出話を交えて告別の辞が述べられ、やがて万雷の拍手が先生をお送りしたことは言うまでもない。

そのあと席を改めてのパーティーで前述の同僚と談笑の最中、二人がほぼ異口同音に述べた感想は、久しぶりに「授業」というものを聴講し、「教わる」ということの楽しさ、有難さを今更のごとく噛みしめた、ということだった。二人とも教師を業としており、教えることには慣れていても、教わる喜びを味わうのは絶えて久しい体験であり、心を洗われる思いがしたのだった。

その何十年か前の話になるけれど、北原先生の授業に列席した私をいちばん深いところで衝き動かしたものも、「教わる」ことの有難味だったのではあるまいか。しかし、「教わる」とは単に受動的経験ではない。教えの場で得た刺激を出発点として、何ものかを探り、何ものかを発見し、何ものかを構築する、という積極性につながる経験でもあるはずだ。あの特別授業を通して得た教訓は――その欠落によってはじめてその尊さを知る価値は世に多々ある、という不易の真理だった。

あの昭和二十年という悲惨な年、あまり類例のない「学校工場」という現実の中で、あの不思議なほど充実した授業は成立した。もっとも、それは私ひとりに関わる極私的体験にすぎないのかも知れない。同級生の中にも似た経験を胸に潜めている人もあろうかと思うが、差しあたり個人的感懐として書きとめておく。

右に記したところは、すべて七十年近い昔の話であり、少なからぬ事実誤認を含んでいる恐れがある。近来わが記憶の溷濁（こんだく）、欠落、短絡は甚だしいものがあるからである。だが私としては、自分がオンマ先生の授業中に十分幸福だったという一点だけを同級生諸兄に伝えることができれば、それでよい。たとえ錯覚であろうとも、私の内部で今なお生き続けているその感覚を書きとどめておきたかったまでだ。